

JOUSEN

愛教研八幡浜支部情報宣伝部だより
—保護者と教育を語る会—

2017. 8. 21発行

- 日 時 平成29年7月31日（月） 13:30～15:30
- 講 師 NPO法人青少年メディア研究協会代表理事 下田 太一 先生
演題「気付いていますか？ケータイが変えた子どもたちの生活」

1 開会あいさつ並びに講師紹介



愛教研八幡浜支部長 関岡 寿登

愛教研八幡浜支部が毎年行っている「教育を語る会」は、三つのテーマを設定して実施している。三つのテーマとは、「教育法規担当者と教育を語る会」、「教育行政担当者と教育を語る会」、そして「保護者と教育を語る会」である。いずれも、会を重ねる度に大きな成果を上げている研修会となっている。中でも、今回の「保護者と教育を語る会」は、子どもたちに直接かかわるPTAの代表者が一堂に会して、教育的課題について研修を深める。連携を強化し、よりよい教育を推進していくという意味でも、大きく期待されている研修会である。

本日は、NPO法人青少年メディア研究協会代表理事の下田太一様をお迎えして、「気付いていますか？ケータイが変えた子どもたちの生活」と題して講演していただくので、各自研修を深めてほしい。

2 来賓祝辞



八幡浜市教育委員会教育長 井上 靖 様

夏休みの初日、小学校の水泳記録会が行われた。そこで大変嬉しいことがあった。開会式で、集まった子どもたちに、「今までに水泳練習をやめたいと思ったり、逃げたくなったりしたことはないか。」と聞くと、手はあまり挙がらなかった。今度は、「自分の記録が思うように伸びなくて悩んだことはないか。」と聞いたら、たくさん子どもたちが手を挙げた。最後に、「一緒に練習をしてきたが、今日のこの大会に出られない人もいる。その人たちの分までがんばってください。」と言ったら、選手達が「はい。」と言ってくれた。予想外のことで思わず、「反応してくれてありがとう。」と言った。私たち大人や指導者は簡単に「分かりましたか？」と子どもたちに聞いてしまう。子どもたちはすぐに「分かり

ました。」と答える。何か指導した後で「いいですか。」と聞くと「いいです。」と答える。それは、こちらが聞いているから答えている。「頑張ってください。」と言って「はい。」と答えてくれたのは、まさに子どもたちの主体性である。指導する上で、そういった子どもたちの主体性を大事にしていきたい。

3 講話

NPO法人青少年メディア研究協会代表理事 下田 太一 先生



情報化社会と呼ばれる、人類が全く経験したことがない新しい世の中で、子育てや教育がどうあるべきかを考えることがメインの仕事をしている。

演題にもあるように、子どもたちの生活が変わったことで問題を起こしているということを皆さんに理解していただくのが今日の話のメインになる。子どもの携帯、スマホ利用問題の原因はどこなのか、何から始まっているのかを考えていきたい。子どもが携帯を使っているいろいろな問題を起こしているが、なぜそれが起こっているのか。使っている子どものせいか、携帯電話会社の説明不足のせいか、学校のせいか、与えた保護者のせいか、携帯やインターネット自体は世界中で

よく使われているものだが、日本で起きている問題の性質は、かなり先進的なもので、あまり例がない。子どもの携帯利用の問題をよく考えてみると、いろいろな価値観があり、大人の責任は非常に大きい。特に日本の場合は突出している。携帯だけではないが、子どもにもものを与えたり、子どもに何かをしたりするときには、子どもの周りには大人が責任を持って指導している。間違っても大人が

よく分からないものを子どもに与えることはない。例えば包丁も、私たちは知っているから子どもに与える。これが包丁ではなく、例えば新しいツールであるレーザーカッターを与えるとする。その場合、多分私たちは試したり、使ったりせず、そのまま使っているよとは渡さない。それが何なのかよく分からないのだから、まず勉強しなければいけないと思うはずである。ところが、携帯に関してはそうではなかった。子どもの方がよく使っているし、よく分かっている。自分たちが知らないものをどうして与えるのか。企業は子ども向けにどんどん宣伝して、学割サービスなどを行っている。それはなぜか、子どもが喜ぶからである。その背景に何があるのか。子どもたちのことを考えていない大人が増えているのではないかというのが私の考えである。携帯に関して、とにかく仕事も家事も忙しいからという理由は成り立たない。本来は子どもの成長のペースは昔も今も変わっていない。言葉を覚える時期や人と関わるコミュニケーションスキルや学習方法は変わっていないが、大人が子どもに要求していることがどんどん増えている。いつの間にか大人の言った通りに行動しなさいと言わんばかりに押しつけがましいことをやっている。その中で子どもたちは与えられた携帯を自分なりに使っているつもりが、いつの間にか問題になってしまっている。

別の言い方をすれば、少しでも大人側が子どもたちの育ちや子どもたちが置かれている状況を理解しようと考え、今の子どもたちに何が必要なかを吟味する余裕を作ることが第一ではないか。携帯の使い方だけではなく、周りの大人たちがどう関わっていくべきなのかも含めて理解していただきたい。

【東京の八王子市の「中学生ミーティング」(2015年)の事例保護者と子どもたちの対談】

テーマ「スマホのある生活を考える」中P連主催

保護者と生徒がミーティングを行い、適切なスマホの利用方法を模索した。

条例で規制をかけるのではなく、子どもたちの生活が幸せになる携帯やスマホの利用の仕方を保護者も子どもも一緒に考え、解決策を見つけていこうと開かれた。

なぜスマホが必要なのか、何歳から必要なのか、スマホは何時までなら使っているのか等、様々な問題について保護者と子どもたちが質問や意見を交わした。

中学生同士がルール作りのミーティングをしたり、保護者で話し合っただけでルールを決めたりするということはあるが、子どもと親が話し合うのは珍しい。この会では、子どもたちが実際どう思っているのかという本音について聞いてみようという会にしてみた。インタビューでは、大人の使い方にも問題があるという意見も出てきた。子どもは9時でおしまいなのに、お父さんお母さんは10時、11時までやっている。どうして自分たちだけ縛られるのかなどである。中学生は自立が加速していく時期であり、自分だけ子ども扱いされるのはうれしくない。フェアに扱ってほしいという欲求が出てくる。大人はこの欲求をきちんと理解しているだろうか。ただ一方的に「これでおしまいですよ。」「ルールでしょう。」「決まってるでしょう。」と言っていないか。これだけでも子どもたちの捉え方や考えが変わってくるのではないか。大人と子どもの生活は違うが、子どもに寄り添っていく部分や、親は子どもが寝た後で使うなど子どもへの気遣いがあってもよいのではないか。子どもたちの思いや考え、立場や立ち位置を理解しようとする姿勢がこれから必要になってくるのではないかと思う。

【(映像)愛知県の公立の中学校に通う3年生(14歳)の事例】

小学3年生のときから携帯を使い始め、休みの日には一日中携帯を手離すことはない。友達と交わすメールは一日百通を越える。



うちの子にもこういう使い方をしてほしいと願うだろうか。今の私たちの価値観からは、この子のような使い方は間違っていると答えると思う。この子はどこでこのような使い方を学んだのだろうか。誰が教えたのだろうか。そこが問題である。本人はこのような使い方は特に問題ないと思っている。だから自分からやめようとは思わない。しかし、周りの人から見ると、おかしい、なぜこんなに使っているのだろうかと思う。包丁だったら使い方が間違っていれば、本人がけがをするように、結果が誰にでも見えるから間違いが分かる。ところが、携帯電話は包丁のように分かりやすくはない。明らかにおかしいと思われることさえ、使っている本人にとっては

はおかしくないという不思議なことが起こる。これはメディアの特徴であって、ゲームやテレビでも起こっていることだが、スマホでは顕著に表れている。「何のためにスマホ使っていますか。」「何のためにスマホを与えていますか。」と聞くと、保護者の目的は連絡のためと答える。子どもたちの目的は連絡するのにあったら便利だけれど、それ以外のことが大事だと答える。同じ道具なのに、保護者と子どもとでは見方が全く違っている。もしここで、使い方についての話し合いがされていけば、子どもたちの考えが見えてきて、正しい使い方についての話に発展していくわけだが、子どもたちの

目的意識が無視されると、子どもの自由だと子どもたちの使い方についていつのまにか目を向けなくなってしまうということが起こってしまう。

では、スマホは一体どんな道具なのだろうか。日本は、メディアという考え方に対して非常に疎かったという問題がある。そこで、今回は、スマートフォンの正体というものを紹介したい。スマートフォンは、新しい時代を作り上げた道具である。正確には、メディアと呼ばれるものである。

それまでの生活はどういったものか。私たちが子どもだった頃のことを思い出してみよう。テレビ、新聞、ラジオはあった。無かったのはインターネットだけである。その頃は、マスメディア時代と言われていた。地域ごとに人々は固まって生活していて、その中で回覧板、手紙、電話で連絡を取り合いながら生活していた。遠くの他の地域の事はあまり考えず、基本的には自分たちの地域のことを考えて過ごしていた。だからと言って孤立しているのではなく、世の中の情報（大事なことや国全体のこと）は、マスメディアと呼ばれる人たちが教えてくれた。だから、マスメディアの社会的意義がとても大きかった。それが、1999年に世界で初めて日本がiモードというモバイルインターネット端末を発売し、その頃からそれを機に携帯、インターネットというものがスタートした。そのあと、SNSなどが広がっていき、インターネットが生活に浸透していった。今まで通り情報はマスメディアが教えてくれて、普段の生活はそれぞれの地域で個人個人が過ごす。それに加えて一人一人がいろいろな人に情報を発信して影響を与えられる、マスメディアのような力を持つことができるようになった。普段だったら接することのない情報を知り、接することのない人たちと自由に交流ができる場ができてしまった。こういった場ができて良いと思っているのは、いわゆる民主主義の考えを強く持っている人たちである。今までは、他の地域に対して情報を発信することはできなかったが、ソーシャルメディアという手段を使えば、一個人の情報を世界中に発信することができる。

では子どもたちはどうなのか。子どもたちは、そのような社会的な意義を持って活動しているのか。もちろん、子どもたちにもやりたいことはある。私のことを知って欲しい、友達を増やしたいなどである。しかし、子どもたちが持っている欲求は、大きな社会で活動するレベルではなかった。子どもたちは、社会の中で生活していく上での基本的なことを学習している最中なのである。だから、子どもたちにはできるだけその子に適した情報を選んで提示しようというのがこれまでの常識だったはずだ。子どもたちの交友関係も気になるし、ゲームや娯楽もいつでも与えてよいわけではない。ある程度コントロールが必要なのである。しかし、子どもたちがソーシャルメディアを手にするによって、一気に活動領域が拡大し、よいものも悪いものもあらゆる情報に自分がアクセスすることが可能になった。大人は、自分でフィルターをかけて制御することができるが、子どもたちは好奇心があるからどんどん手を伸ばしていく。やりたいことを実現するためにインターネットは生まれたはずなのだが、やりたいことがゆがんでいくと、大きな問題が起こる。子ども一人ではできないだろうと思っていたことが簡単にできるようになっている。これが、インターネットの正体なのだ。

どうして子どもがスマホを持つのか。なぜ子どもにスマホを与えているのか。このことをどれだけ大人が真剣に考えているかどうか。これは携帯が登場した頃から言われ続けていることである。携帯を持たせないような条例を作ろうという話もある。なぜ条例が必要なのか、それは問題が起きているからである。そもそも与える理由があるのかということもある。子どもたちの交友関係ががらっと変わったわけではない。市内のすべての子どもたちが仲よくなっているわけでもない。自分たちで企画を立てて何かをしているわけでもない。固定電話を使えば十分連絡できるものを、電話を使わずにラインを使う。どうして私たちは子どもたちに携帯を与えていくのか。包丁を与える理由には明確なものがある。これから生活する上で調理を覚えるのは大事なことであり、自炊に向けての訓練としてはとても大切なことである。子どもに身に付けてほしいことは何かを包丁を与える時に教えていた。みんなが使っているから包丁の使い方を覚えてほしいという言い方はしなかった。では、スマホはなぜ与えるのか。連絡用であれば高価なスマホを与える必要はない。中学生に子供用携帯を持たせている家庭もある。これで十分だからだ。

インターネットには、正しいことが実は存在しない。検索サイトで出てきたことが正しいとは限らないとよく言われる。なぜかという、インターネットはみんなが作っているものだからである。誰かが責任持って作っているわけではない。例えば、みなさんはどちらのラーメン店に行きたいだろうか。

どちらのラーメン店に行きたいですか？

A店評判3.1★★★★クチコミ11件 期待外れ、ぜんぜんダメ！おいしかった～

B店評判5.0★★★★★クチコミ2件 店は古いけど、味はよかったまた行きたいな！

インターネットがいろいろなことを教えてくれるのは確かだ。教えたいと思っている人たちが作っているのがインターネットだからである。かつては、ラーメン専門家がそれぞれの店の特徴をつかんで、味を言葉に代えて教えてくれた。一人一人が自由に発言できるようになると、いろいろな人が書き込みをする。A店の「期待はずれ」という書き込みに反応した人も多いかと思う。もし、この1件の書き込みがマイナスなイメージを作り出してしまうと、お店としては大損害である。A店の店主だったらどうだろうか。この書き込みが原因で売り上げが下がったことが分かったら、みなさんは書き



込みを消して欲しいと願うか、これも一つの意見として残しておこうと判断するか。消すためには、削除依頼や裁判が必要となる。どちらを選ぶかはとても難しい問題である。実際にこういった裁判事例があったが、この裁判では、書き込みに対する削除依頼はできないという結論に達した。自分にとって都合の悪い情報をどんどん消していってインターネットのクチコミなど何の意味もなくなってしまう。情報を操作することになる。インターネットは一人一人が発信している情報が元になってできている情報のかたまりである。インターネットは答えを探すものではなく、ヒント

を探すものでしかない。最終的に決めるのは私たち自身である。その判断が正しいかどうか評価するのも自分自身である。ここに書き込むときも、どんな思いでそれを書き込んでいるのか、自分の考えを表現する力がついて初めてインターネットに書き込むことができるのである。自分が発信した情報が誰かに影響を与えているという責任を自覚しなくてはならない。しかし、こういったことを子どもがすぐに理解できるわけではない。インターネットの使い方そのものではなく、社会の成り立ちや近くの人たちとのコミュニケーションを土台として作られていることを理解していかなければならない。インターネットだからこうなんだではなく、もともと世の中ってこうなんだという話を織り交ぜていかないと、子どもたちの理解と知識が繋がっていかない。ぜひ、身近な事例で子どもたちと話し合うことを家庭や学校で始めていただきたい。

先ほど、八王子市の中学生ミーティングが出てきたが、次の手段として動画を作るという話になり、今年の6月に動画を作った。八王子中学校PTA連合として、こんなことを言いたいということをもとめたものなので、最後に紹介したい。

【映像）八王子中学校PTA連合】

これまで私たちは、携帯やスマホの問題を子どもたちだけの問題と考えていた。ルールを決めるのも注意するのも子どもが対象だった。しかし、歩きスマホやゲームによる交通事故、会話しながらのスマホ利用等、大人は子どものお手本となる使い方をしているだろうか。電車の中でスマホをいじってばかりいるのは大人も同じ。ご飯の時にスマホを見ているのも大人も同じだ。子どもから見て、大人の使い方もある問題があるのではないだろうか。子どものスマホの使い方を注意した時に、大人も同じと言われないようにしないといけないのではないかなと思う。子どもたちの立場に立って、自分の使い方を見直す必要があるのではないかなと考える。その使い方は、子どものお手本になっているか。携帯やスマホの使い方については、子どもたちに注意し、指導することも必要である。しかし、それよりも先に、大人が自分たちの使い方でお手本を示すことが大切だ。子どもたちのために、まず、大人が変わろう。社会の先輩として、携帯やスマホの正しい使い方とはどのようなものと一緒に考え、実践していこう。子どもにどうこう言う前に、私たちがお手本を示そう。私たちが作っている社会なのだから。子どもを育てる時に必要なのは愛情だと思う。ああしろこうしろと怒ることもあるが、まず、自分の思ったことを子どもに伝えられるかどうか、そこから始めるべきではないか。まだまだ答えは見えないけれども、今からできることをどんどん行動に移していく、そういう地域になっていけばよいと思う。

4 謝辞並びに閉会あいさつ

愛教研八幡浜支部法制情報局長 森田 一



八幡浜市でも携帯電話を含めた情報機器等のトラブルが近年少しずつ増えてきている。今日のお話を聞く中で、特に生活習慣や常識・ルールが携帯電話のために歪んでしまって、自分なりのルールを作ってしまうということについて恐ろしいことだと思った。私たち教育に携わる者は現実の社会の中で子ども達が自立することを目標にしている。今日の講演をお聞きすると、情報通信機器でつながっているこのネット社会の中でも子どもたちが自立できるように、私たちが考えていかなければいけないのだと思った。特にその社会の入り口にある大人が、そしてそういう社会の中で歩き始めている子どもたちの近くにいる大人が責任を背負って、役割を担って

考えていかなければならないと思う。また、携帯電話等については子どもたちの自立だけでなく、我々大人も自立していかなければならないと改めて感じた。最後に、下田太一先生のご健康と今後のご活躍をお祈り申し上げたい。